

労働戦線

社会主義青年労働者同盟機関誌

メーデーアツピール

労働運動の危機とはなにか
春闘総括と改良主義批判

本労働運動の進むべき道
—春期闘争批判—

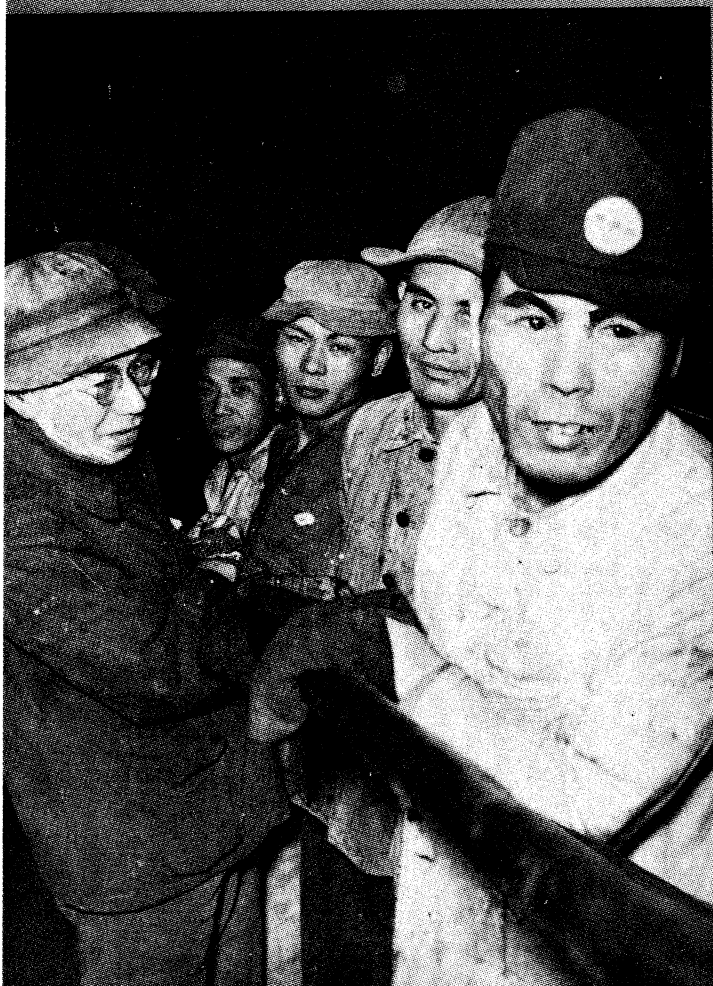
全電通の春闘は
どう裏切られたか
荒川 元

労働者階級は安保改定反対
闘争をどう闘うべきか
森田 実

合理化の背景と問題点
柴田 邦雄

青研
斎藤一郎「戦後日本労働運動」
細谷松大「日本の労働組合運動」
職場の発言
電機労連・国鉄某青年部の意識調査

2



労働者階級は安保改定反対闘争を

どう闘うべきか

——日本労働運動における危険な傾向について——

森田 実

四月十五日、東京都の革命的大学生約三百名は、安保改定反対のスローガンをかかげ、権力の牙城である首相官邸に勇敢にデモンストレーションを行った。地下鉄駅に集結した彼らは、かたいスタラムを組んで首相官邸入口に向かって、殺到した。

武装警官による弾圧によって、二人の指導的幹部が逮捕されたが、彼らは、少しもひるむことなく、強い抗議の意志を表明し続けたのである。

その夜、日比谷野外音楽堂に集った首都の数千の労働者は、この革命的学生の行動によって、勇気づけられ、逮捕された二人の学生運動指導者救援のために、直ちに資金カンパを行い、二万円があつてられた。

翌日、ブルジョアジャーナリズムを通じて伝えられたこの大学生のデモについてのニュースは、組合幹部の連続的な裏切の中で、苦難な闘争を続けてきた下部

の革命的労働者を大いに勇気づけるものとなった。

これは、今や、十五日の行動を、夜の集会という労働者でない行動形態にかえてしまった組合幹部に対する批判という形で、さらにまた四月二十八日には断乎たる闘争戦術を要求するという形で、具体的にあらわれはじめている。

こうして、革命的大学生によって組織された行動は、労働者階級にきわめて積極的影響を与えつつある。この行動は、二月二十八日の大衆的デモ以後の、安保改定阻止闘争の中で、全く画期的行動だったのである。

なぜならば、この行動が、日本資本家階級の権力の牙城に対する真向からの実力行動として組織されたという点にその画期的性格を見出すことができるからである。

労働者階級は、警職法反対闘争以後、一歩後退を余儀なくされた資本家階級が

巧妙なる政治的迂回作戦をとりながら、合理化を中心に資本の強化をはかりつつ労働者階級に対する圧迫を加え、労働組合を階級協調の路線に引きずり込むための必死の努力を行ってきたことを、階級の本能で知っていた。その裏で、警職法改正を示した帝国主義者としての露骨な意図を押し進めてきたことを知っていた。従って、ブルジョアジーとその片棒をかつくブルジョア民族主義者の宣伝にもかかわらず、安保改定問題が、日本における階級闘争の最も重要な課題でありこれを階級闘争として、労働者階級の實力行動によって闘わねばならぬことを、本能的に感知していたのである。

しかし、労働組合の中央幹部と「民主的政党」の幹部の誤りと裏切りのために、春闘の中で、十分にその階級の力量を発揮することができなかった。同様に、安保改定阻止の有効にして強力な闘争を組織することができなかった。

三月三十日に行われた東京地裁の砂川事件無罪判決によって示された敵権力の内部矛盾と、その人民大衆への影響は、

労働者階級がこの闘争をすすめる上で利用すべき絶好の契機であった。

小ブルジョア層との遊離を何よりも恐れ、そのためには労働者階級の闘争をも犠牲にしてきた民同幹部、社会党、共産党の中央幹部にとつてもまた、この事件は、労働者階級の行動を呼び起す上で、決定的なチャンスであるはずではなかったか。

だが、実は、この事件を、労働者階級の行動の激発のために利用せずに、「わが党の方針の正しさを証明した」という一片の声明を行うためにのみ利用してしまつたのだ。

「共産主義者同盟」によって指導される革命的大学生は、これを理解していて大学生が、休暇が終りに近づき東京へ集つてくるや、直ちに、首相官邸に対するデモを組織し、敵の矛盾を利用し、岸信介に対し、「安保改定交渉をすぐやめろ」と迫つたのであつた。だが同時に、彼らは、資本家階級の政府に対し「要求」のスローガンのみに終りはしなかった。

彼らは、「岸政府の打倒」をこの闘争の重要なスローガンとして闘い起つたのである。また彼らは、学生運動のもつ限界をも承知しては、勝利の道は労働者階級の階級的実力闘争によってのみ保証されることを、大胆に宣伝し、自己を、その同盟軍として位置づけることをためらわなかったのである。

労働者階級は、これらの革命的大学生

の呼びかけを受けて起ち、彼らのかかけた旗をわが手に握り階級の実力闘争で起ち上らねばならぬ。

下部の革命的労働者は、このことを本能的に理解したからこそ、これらの大学生の行動に敬意を表しているのである。周知の通り、警備法反対闘争、春季闘争を闘ってきた労働者階級の前に、安保改定反対闘争という重大な階級闘争の政治課題が提起されている。ジグザグのコースをたどりながらも、日米帝国主義間の安保改定をめぐる秘密交渉は進んでい

る。調印と次の臨時国会における批准をひかえ、安保改定をめぐる政治情勢は、今、最終段階に進みつつある。

労働者階級が、資本家階級との断乎たる実力闘争に起ち上るか否かが、安保改定反対闘争の終末と、その後の階級闘争の力関係を決定するものにするだろう。

だが、この問題の重要性にも拘らず、依然として闘いは不十分である。たしかに、われわれは二月二十八日には大衆のデモで闘い起った三月二十八日には、安保改定阻止国民会議が結成された。四月十五日には、東京をはじめ全国の主要都市で労働者を中心に大衆集会がもたれた。大学生の革命的行動は、今後の闘争発展の契機を作った。労働者階級は砂川闘争や、警備法闘争と同様、今後また革命的インテリゲンチヤの提起した道を、階級闘争の道を進むであろう。

だが、現状は決して満足すべきもので

あってすら、あまりにも明確にされているに拘らず、こうした誤りが、国際共産主義運動の方針として、依然として尊重されているところに、現在の世界革命運動の最大の危機があるのである。(この国際共産主義運動の問題については別の機会に詳しく述べようと思う)

日本共産党の幹部たちは、こうしたすでに破産した小ブルの平和主義と民族主義の見本である平和共存政策に「ぶら下り、ソ連、中国共産党と三十七年間の歴史の権威をふりかざして、改良主義者の宣伝を続けているのである。

だが、現実の階級闘争は、彼らの思惑よりもずっと厳しい。彼らの思想と理論と政策は、常に現実の階級闘争の中で点検をうけているのである。少くとも、下部の真面目な革命的労働者が、彼らの指導に満足していないという現実が、彼らの立場を全明らかにしてしまうのである。

こうした彼らの原則的誤謬は、安保改定反対闘争を階級闘争として闘う上で決定的障害となっている。

さきに引用したメーデーアピールは、岸内閣を売国と非難し、安保改定を、日本の独立を速くもかあなたにおしやるものとして位置づけ、すべての愛国民主勢力の団結による、独立、民主、平和、中立の日本をめざしての闘いを呼びかけている。

これが、労働者階級の前衛党によって

はない。警備法闘争の苦い経験から、幾多の教訓を学びとったわれわれは、闘いの十分さの原因に向って大胆なメスを加え、組合幹部の誤りや、自称前衛党の誤りを徹底的に批判しバクろししなければならぬのである。

闘争に特別の責任をもちながら、それを裏切り続け科学的社会主義の理論を裏切り、弁証法的唯物論を投げ捨て、ブルジョア民族主義者になり下がっている宮本顕治をはじめ、日本共産党中央幹部の全く誤った見解と労働者階級の斗争に対する犯罪的役割を明らかにしようと思う。

二、日本共産党中央幹部への警告

日本共産党は、その中央機関誌で毎日安保改定問題を取りあげている。最近の日本共産党の最も重要な文書「メーデーアピール」(四月十七日アカハタ)の中で、次の如く呼びかけた。

「アメリカ帝国主義は、日本を半ば占領し沖繩、小笠原をわがものにし、日本の独立を基本的にうばいとしている。アメリカ帝国主義と共謀して、売国反動勢力は、軍国主義の復活を強化してきている。安保条約改定は、この条約の侵略的同盟の性格をいっそうつよめ、日本の独立を速くもかあなたにおしやるものである。岸内閣は、かたがたの売国の本質をおしかり、『自主独立』のいつわりのスローガンで人民をまどわそうとしている。『日本人民は……独立、民主、平和、中立の日本をめざして、いっそう奮闘するであろう。すべての愛国民主勢力が団結し、民族民主統一戦線をつくりあげるであらう』

日本共産党の中央幹部は、このメーデーアピールという重要文書の中で、彼らのブルジョア民族主義者としての立場を全く明瞭に示した。

マルクスとレーニンにとっては世界社会主義革命をめざす全世界の労働者階級の巨大な革命的デモンストレーションの日であったメーデーは、現在の「共産主義者」によって民族独立と中立をめざし「国の政策」を平和の方向に変えさせるための「広汎な人民大衆(小ブルジョアと読め)」の祝祭日に変えられてしまった。日本共産党がかける二十七本のスローガンは、日共幹部のすくい難い改良主義者としての本質をあまりにも明確にしている。全く「社会主義革命」という言葉を恐れているかの如くである。彼らは社会主義革命と資本家階級打倒という言葉が、あたかも当面の改良のための民主主義的斗争を否定するかの如く考えているようである。だが、こうした考え方は

呼びかけられ、労働者階級の戦術を決定する考え方として出されるとき、革命的労働者は、この誤った考え方を批判しないわけにはいかないのである。しかもこれが、大きな影響力をもっているときには尚更である。

昨年、日本労働者階級が警備法反対闘争に起ち上り、資本家階級に重大な脅威を与えているとき、陳毅中国外交部長とグロムイェンソ連外相によって呼びかけられた「中立日本」の路線は、それと前後して行われた総評、社会党、共産党幹部の相談と中国訪問によってそれぞれ幹部に受け入れられた。今や、日本資本家階級に対し、「中立政策をとれ」と要求する運動方針において、総評、社会党、共産党の幹部たちは、政治的意志統一を行ったのである。

従って、日本共産党の幹部の考え方は単に、彼らの何人かの考え方というのではなく、全体の闘争に影響を与えるものとして出ているのである。(日共の中央幹部諸君よ、こう書いたからといって諸君の労働者階級への影響力が強いというように考えても困る。諸君が社会党と同じ考えになったというところは、諸君と諸君の親分の一層の墮落を意味しているに過ぎないのである)

彼らの考えの誤りの第一は、帝国主義に対する全くの無理解にある。資本主義の最高の発展段階としての帝国主義についてレーニンは、「帝国主義論」の中で

科学的社会主義の理論とは無縁である。「社会主義革命は、一つの行動ではなく、一つの戦線にわたる一つの戦闘ではなく、激烈な階級の衝突の時代であり、全戦線にわたる、すなわち経済および政治上のあらゆる問題にかんする、長くつづいていくたの戦闘であって、この戦闘はブルジョアジーの収奪としてのみおわりうるものである」とレーニンは一九一六年に書いている。彼らは、こうした自明のことを忘れてしまったのであろうか。

労働者階級の「前衛党」の幹部諸君があらゆる闘争の中で、敵権力の打倒を呼びかけず、全世界の労働者の一大統一行動としてのメーデーにおいて、このことを呼びかけないとしたら、彼らは「前衛党」の幹部としての資格を一切失ったものといわねばならない。

彼らはこうした批判に対し「平和共存」政策の中に現在の世界共産主義者の任務があるのだと答えるかも知れない。だが、まさに、この平和共存政策こそが世界社会主義革命の目的を放棄した現在の修正主義者の誤りのうちで、最大の誤りである。いまや帝国主義の下に呻吟している労働者階級に対して、「資本主義と社会主義との平和な経済競争」社会主義が勝利するまで、諸君の解放はオアズケだと呼ぶことが革命家の任務といえるだろうか。現在の世界革命運動におけるフルンチョフの平和共存路線の誤りは、最近の植民地革命運動の敗北によ

明確な規定を行っている。生産の集積と独占、銀行資本と産業資本と癒着して金融資本となり金融寡頭制を生み出した結果として、資本が民族国家の枠を越えて進出するという帝国主義に関するレーニンの規定は、決して古くさくなくなっているどころか、一層の正しさを証明している。金融資本は、独立国でさえも、その国の資本家と国家の役人を買収することさえ、あえて行うのである。

現実の日本における階級闘争は、日本資本主義が必然的に帝国主義的發展をとりげざるを得ないことをあまりにも明瞭にしている。事実を見ないブルジョア民族主義者だけが、「アメリカ帝国主義者は日本の独立をうばいとしている」という規定にしがみつき、現在何よりも重要な、日本のブルジョアジーに対する労働者階級の闘いを弱める役割をしているのである。真面目な労働者は日本資本家階級が、昨秋資本家階級の牙を労働者階級に向けて警備法を改「正」しようとしたとき、これがアメリカ帝国主義者への一層従属を強めるものだとして、他の独立の要求と結びつけて闘え、日共幹部が宣伝したことは、決して闘争の前進に役立たなかつたばかりか、日本資本家階級に対する闘争を弱め、労働者階級の闘いを裏切る意味をもっていたことを決して忘れはしないであらう。

今また、安保改定反対闘争の中で、日本資本家階級の陰謀をバクろしようとし

ないことは、闘いの具体的前進に役立たないことを明らかにしなければならぬ。安保改定の陰謀が、アメリカ帝国主義者の反革命体制強化の策謀を背景にしていることは明らかである。これを背景にしつつ、ある程度それを利用して、自己の帝国主義的膨脹政策を実現せんとする日本資本家階級の手によって、安保改定の陰謀はすすめられているのである。

警備法闘争と春闘を、資本家階級の激しい攻撃の中で闘い続けた労働者階級の前に、安保改定をめぐる日本資本家階級の真の意図をおおいかくし、これが、日本資本主義の客観的運動法則が必然に導く政策であるという真理を覆いかくすことは、労働者階級への裏切りを意味する。これが、日本資本家階級に「中立政策」を要求するという没階級の方針と結合して語られるとき、その裏切的役割は、一層明確であるといわねばならぬ。

私の以上の結論に対して、彼らは、次のような非難を加えるかも知れない。すなわち、社会主義革命の勝利がなければ、労働者階級は一切のものを獲得出来ないと考えられることは全く誤りだ。その通りである。民主主義的的要求の実現に示さないようなものも、社会主義革命に関心を示さないものと同様、労働者階級の前衛としての資格を失ったものである。だがしかし、現実の階級闘争は、資本に対する革命的闘争によってこそ、——それによってのみ、部分的、改良的

闘争にも勝利出来ることを教えているのではないか。

日本共産党のこうした誤りは、社会党総評民同の誤りと全く同じものである。こうした誤りに対する労働運動内部からの批判は高まりつつある。日和見主義におかされた中央幹部と下部の革命的労働者との間の喰ひかちでは、民同と革同の対立の中に労働運動の二つの潮流をみてきたが、今日では、労働運動内部の二つの潮流は、より根本的な対立として、中央幹部と下部の革命的労働者という形であらわれている。「中立化政策」による社会党、民同、革同、共産党の一致は、彼らの間にあった戦術上の対立を解消させる方向に向いつつある。

今日、共産党のアピールに代表される考え方が上がった考え方が労働組合組織によっても発表されるようになって来た。一例をあげよう。東京地評は、三月二〇日「安保体制打破、条約廃棄、改定阻止の闘いについて」のはじめで次のように述べている。不十分なが日本資本家階級と階級闘争として、安保改定問題をとらえていることを示した。すなわち

「一月七日の日米共同声明で「日米新時代」を掲げた岸政府は、日米軍事同盟の強化、軍国主義復活、核武装をめざして日米安保条約の改正交渉をすすめ、四月中に調印することを明らかにしている。

日米独占資本と岸政府は、こうした日米軍事同盟、核武装を背景とするアジア侵略の野望にもえている。彼等はこうした帝国主義的目的を遂行するために、安保条約改正交渉を急ぐと共に、国内の安保体制を強化し、条約改定のための条件をつくりあげようとしている。

彼らはこのために教育の軍事化をめざす勤務評定を強行し、労働組合をはじめとする民主組織の破壊、大衆運動の弾圧を目的とする警備法改悪を策し、これが国民の抵抗によって廃案となったにも拘らず、直ちに再提出を企むと共に、公安条例等既存の諸法規を使って大衆運動の弾圧を強行している」

この中には、理論的に幾多の不十分さがあるにしても、安保改定反対闘争はまづ何よりも日本独占資本とその政府に対する闘争であるという下部労働者の階級の本能を反映しているという点で、上記日本共産党のアピールよりもましてである。

日本共産党中央のこうした立ちおくれと誤りを明らかにすることは、現在の労働運動の中にある二つの潮流を明確にする上で、決定的に必要である。

私には、以上の展開の中で、主として日共中央幹部の誤りを批判するという形で論をすすめてきたが、ここで春闘の総括の中でも述べたように、労働運動の危機を招いている危険な潮流に対する革命的労働者の立場を明らかにしたいと思う。

第一。平和共存政策の戦略路線の上に当面の戦術としての中立化政策をかかげる日和見の潮流に対して、世界社会主義革命と階級闘争の思想と戦術を対置すること。

第二。小ブル層との統一を何よりも重要と考える誤った統一戦線論に対して、労働者階級の生産点における階級の実力闘争。この基礎の上のみ、小ブル層と正しい統一行動が可能であるという思想を対置すること。

第三。社会主義革命の展望をまたず、相も変らず、民族民主統一戦線による民族民主革命を主張するブルジョア民族主義のこと。

三、ブルジョア民族主義の見本

宮本顯治の理論

日本共産党中央機関誌「前衛」には、彼らの署名入り論文が、一月号に宮本、二月号神山、三月号藤澤、四月号武井武夫、五月号伊井と連続的に掲載されている。

私は、第二章で日本共産党の基本政策についての原則的批判を行った。第三章ではこれらの日共の指導的幹部の考え方を分析し、日和見主義方針への批判を行いたいと思う。

同時に彼らの戦術問題に対する考え方が全く観念的空論的であることを明らかにしよう。なぜならば、われわれが、平

義日和見主義の潮流に対して、社会主義革命と資本家階級の打倒の思想と戦術を対置すること。

今や労働者階級の中にあるこうした二つの潮流を明確に分離し日和見主義の潮流を捨て去り、革命的労働者の道を進まねばならないのである。

春闘総括と、安保改定反対闘争の戦術を労働者階級の中で徹底的に議論しつつこの二つの潮流を明確にして行くことは、わが社会主義労働者同盟と全同盟員の神聖なる義務であるといわねばならない。

和共存と中立政策に対する非難を加えるとき、彼らは、われわれを「観念論、空論主義」として非難するからである。私は、戦術問題を語ることに、この言葉をそのまま「のし」付きで、彼らに返上しようと思うのである。

前衛一月号に「平和と独立の闘争の焦点——安保条約の改定問題を中心に——」と題する宮本顯治の論文が掲載されている。

彼は、第一章で、昨年十一月の時期の藤山外相と三木総長官の発表について説明したのち、「アメリカ占領制度の

サンフランシスコ体制へのきりかえ、戦後日本資本主義の発展、日本独占資本の復活強化とこれらのブルジョア民族主義的政策によって、日本人のあいだに

たかも日本が完全に、または基本的に独立国になったかのような幻想をうそつけていることは重大な問題である」(第七回大会政治報告)を引用し、「このような幻想によるなかばまひ状態の影響」が「社会党だけでなく共産党のなかにも浸透した。」として、「まひ状態は、まさに独立を失っている民族の二重の悲劇ではなかったかと述べている。これが第一章の最も重要な部分である。

第二章の中で、宮本は、闘争の前進のために考えおく必要のある若干の問題についてふれている。「第一、政府による交渉が開始されたいごも、日本の労働運動、民主運動全体としてこの問題のもつ非常に重要性についての認識が十分でない状態があった。」との正しい指摘の上に、一つの原因にふれて、「第二、

民主勢力の中でも岸構想の示した安保条約の改定の陰謀は日本人をアメリカの侵略戦争にいつそうつよくまきこむ方向だということと比較的理解されているが、それが民族の独立をいよいよ困難にする点が認識されていない傾向がある。」「それが(安保条約の体制の意味)単に、侵略戦争の体制だけでなく、日本民族の主権をふみにじっている体制だという認識のあいまいさの問題である」とい

う全く誤った指摘を行っている。

宮本のいわんとするところは、日本民族がアメリカに従属していることについての民族感情を激しくもつべきだということである。

宮本は、このあとで、第七回大会決定のたのち「わが国の場合には、平和と独立の関連をあきらかにして、平和と独立のためにたたかうことがもとも重大で緊急な任務なのである」と述べている。以上が宮本論文の紹介である。この宮本論文は、前衛一月号の巻頭論文であることから、この論文を現在の日共中央の指導の見解を述べたものと判断してもよいであろう。

そうだとすれば、その内容はあまりにも貧弱すぎるといわねばならぬ。彼は、安保改定反対闘争を語るにあたって、何よりも警備法闘争の総括と、その中からの教訓の摂取からはじめべきであった。恐らく、十二月十五日には書店に出版されたこの本の原稿は、おそくとも十一月下旬までには執筆されたと考えられる。

当時警備法をめぐる生々しい階級闘争が、敵の攻撃と味方の指導部の裏切りの中で、闘われていた。労働者階級に

とっては、この偉大な闘争から、正しい教訓を学びとることこそが、今後の前進のために必要であった。だが、宮本はこうした労働者階級が何よりも求めていた問題にいきさかも回答を与えずに——私

は避けている——とか思えないのだが、——ブルジョア評論家らしく、警備法闘争の現実とは全く別、労働者階級に向って、「民族独立」の意識が弱いことをお説教しているのである。これは、彼が警備法闘争に不熱心であったことを何よりも証明している。

宮本の論文全体をよく読んでみればわかるように、彼は、この論文の中で七回大会の決定を「正しい」ものだと思者にして、ほんの少しのことしかいっていない。強調していることは、第一に、平和と独立の闘争の前進のためには、民族独立の意識を強くもち「マヒ状態」の克服を呼び掛けていること、第二は、アメリカ帝国主義者に対する民族独立闘争を今こそ強化し、その観点から安保改定反対闘争を闘えと呼びかけているのである。この二つが重要な内容である。

だが、警備法闘争から春闘と、日本資本家階級に対する激しい階級闘争に起こ上っている労働者に対してかかるとを訴えることは、宮本の主観と反対に、客観的には、何ら役立たないばかりか、むしろ有害ですらあったのである。(彼の理論の根底が全く誤ったものであること

は、前の章で証明したので、ここではその実践的役割を明らかにしよう。)

何故ならば、労働者階級が、偉大な警備法闘争に起った基礎は、労働者階級の敵階級に対する階級の本能が呼びさまされたことであった。そして、労働者階級の階級の実力闘争が、奇妙な勝利ではあったとしても、「偉大な勝利」の基礎となっていたのである。そして、この勝利が、安保改定の陰謀にきわめて大きな打撃となったのである。このことは安保改定反対闘争における勝利の見通しを与える偉大な教訓とすべきであったのである。すなわち、労働者階級の「前衛」は労働者に対し、「民族意識」ではなく、「階級意識」を宣伝しなければならなかったのである。

警備法闘争における日本労働者階級の勝利は、アメリカ帝国主義者にとって大きなショックであったことは周知のことである。警備法闘争は、日本資本家階級の帝国主義的膨脹政策の陰謀を粉砕し、それによって、日本帝国主義者の陰謀を粉砕する道は、資本家階級と徹底的に闘いその打倒以外にはないことを労働者階級に教えたのであった。この道こそ、平和を守る道であることを教えたのであった。

だが宮本は全く逆のことをこの重要な時期に語ったのである。これは労働者階級に対する裏切りを意味しないだろうか。明確な裏切りであるといわねばなら

ぬ。
宮本こそ、ブルジョア民族主義、改良主義者の見本であり、現在版日本カウツキーであることは、以上の簡単な説明によっても明らかである。彼のブルジョア評論家的本質は今や明瞭である。「観念論者、空論主義者」の名は彼に全くふさわしいものである。

以上私は、宮本の議論のまかしを、パクロした。神山、聴波、伊井の「中立政策」論を一々紹介して、それぞれの議論の中にある矛盾をあばき、一つ一つ論

四、むすび

以上私は、現在の労働運動の危機の原因を、安保改定反対闘争の面から、とくに日共幹部への批判というかたちで、論をすすめて来た。

資本家階級は、今日、「転換点に立つ総評」を宣伝している。たしかにこのままで進めば、総評は、資本家階級の思う通りに「転換点」に立たされてしまうであろう。

私は、資本家階級の宣伝とは逆に、「危機にたつ日本労働運動」と名づけよう。なぜなら「春闘総括」でも述べた如く、春闘は、日本労働運動の今後にきわめて深刻な問題を提起したからである。警職法闘争から春闘へと、日本労働者階級の闘争のエネルギーは、その指導部

クすることは、読者にとつては全く退屈なことであろう。ここでは、彼らが宮本と全く同類であることを結論づけ、「前衛」の如き、ブルジョア民族主義者、官僚主義者の「官報」を最早闘争の指針にすべきでないことをおすすめるだけにしよう。

必要なことは、こういう貧弱で頑固な民族主義者の影響力を、労働者階級の中から抹殺し、社会民主主義革命をめざす階級闘争の高揚を作り出すことである。

の裏切りのために正しく発展させられなかった。
大産業の労働組合は、春闘闘争の中でかけた要求を勝利的に勝ちとることなく、闘争を終結してしまつた。春闘闘争に発揮されたエネルギーが、そのままの闘争に向つて発展させられない危険性はあまりにも濃厚であるといわねばならぬ。警職法闘争から、春闘へのあの恐るべき裏切りと同じ裏切りが、選挙闘争を理由に、行われる危険が強い。

今や、革命的労働者は、こうした危険を、とりのぞき、階級闘争を前進させるために断乎たる決意と、何ものをも恐れない勇気とをもって、これにたち向わねばならぬ。

下部労働者中での、春闘総括を徹底的に討議、幹部の裏切を徹底的にパクロし、安保改定闘争の重要性と勝利の道について討議しなければならぬ。
革命的労働者の任務は、資本家階級の安保改定の陰謀を粉砕し、岸内閣の打倒のために、ゼネストを呼びかけ、調印段階における決定的闘争の準備にとりかからねばならぬ。(当面の方針については「青年労働者」を参照していただきたい。)

下部労働者中での、春闘総括を徹底的に討議、幹部の裏切を徹底的にパクロし、安保改定闘争の重要性と勝利の道について討議しなければならぬ。
革命的労働者の任務は、資本家階級の安保改定の陰謀を粉砕し、岸内閣の打倒のために、ゼネストを呼びかけ、調印段階における決定的闘争の準備にとりかからねばならぬ。(当面の方針については「青年労働者」を参照していただきたい。)

事務所移転のお知らせ

社会主義青年労働者同盟も皆様の御支援と御協力によつて社会主義をめざす青年労働者の全国的な組織として、発展の一途をたどつておりますが、今回、前の事務所が手狭になりましたので、左記へ移転致しました。

新宿区三光町一番地
世界労働運動研究所気付
電話(三六)四九七七

なお、社会主義青年労働者同盟の機関紙「青年労働者」(八号から活版化)および本誌「労働戦線」との、機関紙、誌の交換および交換の継続をお願い致します。